

内弟子生活 マグヌス・ロイシュ



9月20日にノルウェイを発ち、ウィーンで乗り継ぎ、そこから直行便で11時間半、日本に向かう飛行機に乗りました。胸はドキドキし、頭は稽古の事で一杯でした。

地球の反対側の国へ初めて飛び立つ青二才の私にとっては、恐い気持ちとある種ワクワクする気持ちとがありました。振る舞いや規範、規則など大きな文化の違いはあるのか。期待のしすぎじゃないのか。外国へ旅をするのが初めての人なら、どんな経験をするのか全く心構えができないと思います。私がまさにその通りでした。

日本に着くとバスで所沢道場まで行き、そこでノルウェーの先輩のラーシュ・ペーテル・フェルダールと会いました。秋の東京は暖かいはずなどなく肌寒いと聞いていました。けれどもその時は酷暑であり、35℃はあろうかという気温が週末まで続きました。幸い日本の友人の助言で夏の服を持って来ていました。ラーシュの方はマウンテンブーツにジャケットにセーターという、さぞや暑かろうといういでたちで歩き回っていたことを思い出します。



弘明先生との最初のミーティングは、気取らない気軽な感じでした。小林保雄先生と弘明先生両方のセミナーに参加したことがありましたが、日本で両先生の道場に来るのは、私にとって途方もなく特別な思いでした。落ち着いた歓迎を受け、すぐに安心した気持ちになりました。全く訪れたことのない国の道場でこのようにくつろいだ気

持ちになろうとは思ってもいませんでした。

着いてすぐは普通じゃない暑さに面食らいましたが、その後、初めての仕事や、すべきことの説明を受け、夕方にはすぐに稽古が始まりました。時差ボケと飛行機での睡眠不足で、稽古は事のほかきつく厳しく、朦朧と歩いているような感じでした。しかし稽古自体は思ったより助けになりました。体は前より楽になり時差ボケは既に消えていました。一日目は早く眠りにつきました。

翌朝は清掃の仕事から始まりました。畳を拭き、通りの落葉を集め、剣丈の棚、窓、机、コンピューターの埃を払い、流し、棚、トイレに至っては、徹底的に磨き上げます。最初は言われたからやらなければならない仕事と思ってやっていたのですが、後にそれは「稽古」つまり鍛錬と

なりました。かつてない程きれいになったと自慢できるぐらい名誉にかけて自分の掃除をするのです。掃除それ自体が、どのくらい自分が没頭できたかを映す鏡なのです。つまり私たちは常に完璧を目指し、それ以外はありませんでした。実際、最後には掃除や雑巾がけを楽しむようになりました。心は落ち着き、しかも感覚が研ぎ澄まされます。それはまさにこれから数週間、数ヶ月と続く他のすべての出来事と同じように合気道の一部でした。内弟子を経験して自分の何かが確実に変わりました。



住込み体験は、精神的なものだといわれていますが、それがどんなに大事なことは、何ヶ月もたった後で初めてわかりました。稽古や滞在の目的そのものについて「なぜお前は合気道の稽古をするのか。何を達成したいのか。それらしき理由があってこれを行っているのか」など様々な疑問がわきあがります。実は最初、内弟子になる自分の目標、“使命”は、少しでもうまくなるよう一に稽古、二に稽古、ひたすら稽古することだと思っていました。しかしながら二、三週間たって、これは違うぞ、何か他に重要なことがあると気づきました。成熟したふるまい、敬意をはらった態度、思いやり、平穏な心を保つことなどそれらの経験を積む場なのではないかと。常に疑問は頭に浮かびましたが、言ってみれば、合気道の生活の全てが様々な経験の場であるのです。他の人々とどう関わるか、どう声をかけどうふるまうのか。真に心の平安に到達して、人生の様々な側面において合気道で養ったことを実行することになるでしょう。これは私の人生で学んだ最も大事なことの一つです。合気道は稽古だけしていればそれでいいわけではなく、他の全てのことが大事なのです。

合気道の練習方法はこれにより劇的に、良い方向に、変わりました。

今日の合気道の稽古法について手短かに説明すると、まず型を練習します。決められた攻撃に対し、決められた技を行い、一組になって互いに呼吸の合った動きをし、十分に稽古を積んだ場合には、流れるような動きになります。私が学んだのは、「技には型は必要ない」、ということです。その時その時の状況に左右されます。一教という技一つをとっても、毎回異なります。相手の身長、体重、呼吸、中心、気、その他色々な状況が関係しています。

例えば、正面打一教をラーシュと呼吸を合わせながらかけることはできます。しかし山脇先生相手となるとまったく歯が立ちません。



練習を積んで、受け身を覚え、力が抜けて、最後に何とかゆっくりとした一教ができるようになりました。後になって考えてみると、同じ一教でも、型はともかく、感覚はかなり異なるものでした。

私が「技には型は必要ない」と言うもう一つの理由は、この感覚、もしくは「呼吸」にあります。一つ一つの技をかける時の「呼吸」そのものが「型」であるとも言え、それをつかみ取ることが上達の秘訣なのでしょう。しかしこれは実際には不可能かもしれません。合気道家そ

れぞれが各々の「呼吸」を持っているからです。

結果的に小林道場に居て分かったのは、相手を受け入れる能力です。自分のやり方ではなく組んだ相手に注意を払い、自分の受けも常に相手と調和をとりながら行うということです。技は「お互い」に行います。「やり方」は一緒に創り上げるのです。多くの時間や年月を費やさなければ、分からないことが合気道にはあります。私は上っ面を撫でたくらいです。

小林道場の滞在では勿論、いわゆる精神的な経験だけではありません。たくさんの興味深い旅行にも、行事にも、岩井の合宿にも行きました。

弘明先生宅の毎週水曜日の朝食は毎週早く来ないかと楽しみにしていました。実代子さんの驚くほど美味しいカボチャのスープ、納豆、生わさび、その他にもたくさんあります。そして弘明先生が入れて下さる食後のコーヒー、ほんとうに忘れ難いです。テーブルには明るく楽しい雰囲気満ち溢れていたことを、私は一生忘れないでしょう。

伝統的なお茶会に招かれ、自分でお茶を点てさせて頂いたことも素晴らしい経験でした。

孀恋への旅も忘れ難い経験です。色々な温泉に連れて行って頂きました。そして山脇先生の奥様には美味しい料理をご馳走になりました。

神田先生は、私とラーシュをかつて住んでいた山間の温泉に招いて下さいました。そこは山の気が満ちていて、孀恋の山の山脇先生の所と同じ感じがしました。そこは名の知れた温泉で多くの方が訪れる場所ですが、静けさと山の霊気がありました。

弘明先生の誕生日は、忘れられない思い出です。ラーシュと私とアフェフは、先生のご家族と日光への旅にお供させていただきました。歴史のあるホテルを訪ね、日光のお寺や初代将軍のお墓を見物しました。私にとっては強い衝撃で、日本とその文化の見方が変わりました。悲しいことにその日に風邪をひき、道場に帰る前のお寿司を食べにいけませんでした。高熱と喉の痛みで私は先生の所有するアパートで休ませてもら

い、行き届いた看病を受けました。

まるで家族の一員のような感じでした。どのくらい感謝しているか言葉もありません。一生忘れないでしょう。

今回、私は先輩のラーシュ・フェルダールと共に小林道場の内弟子になり、この感想文では伝えきれない、普通は経験できないような旅に身を投じ、たった二ヶ月の間に、できる限り日本の社会に溶け込もうとしました。厳しい稽古、掃除を通じ何事も集中すれば満足し安らかになると感じ、多くの思い出を得て、もっと滞在したかったです。

小林先生、弘明先生、ご家族、そして道場の皆さん、人生でまたとない素晴らしい贈り物を ドモ アリガト ゴザイマシタ！

